

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370054

研究課題名(和文) 新ニヤーヤ学派における言語理論の伝統説形成についての研究

研究課題名(英文) A Study of the Formation of Traditional Views in the Navya-nyaya Philosophy of Language

研究代表者

和田 壽弘 (Wada, Toshihiro)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：00201260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：インド哲学の中で現代に伝統が継承される新ニヤーヤ学派の言語理論を解明するため、この学派の体系を確立したガンゲーシャ(14世紀)と革新的と評価されるラグナータ(16世紀)に焦点を合わせ、定動詞語尾および動詞語根に関するそれぞれの文献のテキスト校訂と英訳と解説を行った。この学派の言語論の特徴を解明し、併せて、後代ではどちらが伝統説として受け入れられたのかを探求した。インドの諸学派は「一枚岩」に様に見られることが多いが、かなりの異論があったことが判明した。

研究成果の概要(英文)：This project has provided an edited Sanskrit text, English translation, and annotation of one fifth of Raghunatha's "Discourse of Verbal suffixes" (Ahkyata-vada) in order to clarify the Navya-nyaya philosophy of language. This text also discusses the meaning of verbal roots in the following part, so I have translated the "Verbal Root Chapter" (Dhatu-vada) of Gangesa's Tattva-cinta-mani with annotation as well. As a result, the project has made clear and the Navya-nyaya method of analyzing sentences and the difference of those two important philosophers' views on the meaning of verbal suffixes and roots and has concluded which view was accepted as traditional in the manual texts. The analysis of those historical texts suggests us that an Indian school of philosophy is often considered monolith, but in the school there are much more different views than we imagine.

研究分野：インド哲学

キーワード：新ニヤーヤ学 ラグナータ 定動詞語尾 動詞語根 ガンゲーシャ マトゥラーナータ 言語哲学

1. 研究開始当初の背景

新ニヤーヤ学派(新N学派)は14世紀にガンゲーシャによって体系が確立されて以来、その術語及び記述の方法はインド哲学のすべての学派に浸透していった。哲学以外の分野、例えば修辞学やダルマ文献においても注釈書を読む場合には、新N学派の術語の知識なくしては理解ができない。中世インド思想を研究するためには、この学派の研究は避けて通れない。中世以降のインドの哲学・思想・宗教に関わる文献の研究にとって、この学派は基礎学を提供すると言っても過言ではない。加えて、現代にまで繋がる数少ないインドの学問伝統であり、生きている。

本申請者はこれまで新N学派の推論理論の研究を中心に続けてきて、この学派の術語と記述方法に関する研究の蓄積がある。

我が国における新N学派の言語論の主要な研究は、本申請者による「インド哲学における言語分析(1)~(5)」(1990, 1993, 1993, 1995, 1996)と題する一連の論文が端緒である。この研究は、17世紀に著された『ニヤーヤ・シッダーンタ・ムクターヴァリー』(論理定説真珠連: *Nyaya-siddhanta-muktavali*)「言語章」(Sabda-khanda)を和訳・分析した。この書は14世紀のガンゲーシャと彼以降の説を強引に要約したものであって、必ずしもガンゲーシャもしくは新N学派の立場が明確にできたわけではない。

この後、本申請者が支給を受けた科学研究費補助金・基盤研究(C)「新ニヤーヤ学派における言語分析の方法に関する研究」(平成23~25年度)によって、ガンゲーシャの『タットヴァ・チンターマニ』(真理宝珠: *Tattva-cinta-mani*)第4部「言語部」(Sabda-khanda)「定動詞語尾章」(*Akhyata-vada*)の英語翻訳と分析とを終え、ガンゲーシャの立場そのものを明らかにした。

近年、新N学派の術語がどのように他学派に伝播したのかという問題に関する複数の論考が、Y. ブロンクホルストやB. ディアコネスク等によって発表されたが、言語論への言及は極めて少ない。また後者は、言語認識に関する理論の歴史的発展過程を新N学派のみならず他学派との関わりで解明した著書 *Debating Verbal Cognition* (2012) を上梓した。重要な研究成果であり、今後の研究の出発点になると思われるが、その中ではラグナータ(16世紀)の言語理論に簡潔に言及しているのみである。

ラグナータには、重要な独立の哲学的作品が3つあることが知られる。先ず研究されたのは、『パダールタ・タットヴァ・ニルーパナ』(範疇真理述解: *Padartha-tattva-nirupana*)であり、K.H. ポッターによって翻訳と分析が1957年に出版された。次に研究されたのは、『否定辞論』(*Nan-vada*)であり、B.K. マティラルによって翻訳と分析が1968年に発表された。残る『定動詞語尾論』(*Akhyata-vada*)は、翻訳も論文もない。

ポッターとマティラル以降にもラグナータに関する研究は極めて少なく、重要なものには、2013年に発表された、J. ガネーリの“Raghunatha Siromani and the Origins of Modernity in India”があるが、言語論に関する言及がほとんどない。

2. 研究の目的

(1) 新N学派の言語理論はガンゲーシャ(14世紀)の『タットヴァ・チンターマニ』「言語部」によって確立されるが、その後の発展は、ラグナータ(16世紀)の一連の言語論に関する独立の作品を見ることによって明らかになる。本研究では、ラグナータの独立作品である『定動詞語尾論』(*Akhyata-vada*)の英語翻訳を作成しつつ分析することによって、ガンゲーシャ以降のこの学派の主流(伝統)となった言語分析の手法の特徴を、明らかにし、それがガンゲーシャの説からどのように変容・発展したのかを解明する。

(2) 本研究が目指すのは、単に歴史的発展を見ようとするだけではない。新N学派の綱要書で言及される学派の伝統説は、体系を確立したガンゲーシャのものであると思われるがちである。例えば、学派の綱要書では遍充(論理的随伴関係: *vyapti*)の確定定義としてガンゲーシャのものが先ず言及される。さらに深化した定義を提示する必要がある場合には、ラグナータによって修正された定義を提示する。本研究は、これと同様に言語論でもガンゲーシャの説を基本説と見なし、ラグナータの説を改良説として扱うという事態が起きているかどうかという観点を重要視する。

(3) 研究成果が国際的に共有されることを目指して、英語で論文を執筆し、海外の国際的学術誌・記念論集などに投稿する。

3. 研究の方法

(1) ラグナータの『定動詞語尾論』の校訂テキストは使用に耐えうるものがないので、先ずは諸刊本を用いて校訂する。その後に英語訳し、解説を施す。本文を理解するための前提条件がかなり多いので、これらを明瞭にするために、存在が知られている註釈書をできるだけ入手し、使用に適したものを決定する。

(2) 『定動詞語尾論』の中に動詞語根の意味に関する議論が含まれる。この議論もガンゲーシャ(14世紀)の『タットヴァ・チンターマニ』「動詞語根章」(*Dhatu-vada*)の議論を前提としているので、両者の比較により言語理論の発展を解明する。

(3) 綱要書には、本研究が取り組む定動詞語尾と動詞語根の意味の議論に立ち入る、いずれも17世紀頃の作とされる『ニヤーヤ・シッダーンタ・ムクターヴァリー』と『マニカ

ナ』(Mani-kana)を取り上げ、ガンゲーシャ説とラグナータ説への言及の仕方を調査する。有名な他の綱要書である『タルカ・サングラハ』(論理精要: Tarka-samgraha)およびその註釈書である『タルカ・ディーピカー』(論理灯明: Tarka-dipika)は、その議論に立ち入らないので使用しなかった。

4. 研究成果

(1) 『定動詞語尾論』を英語に翻訳するための前段階として、以下の準備作業を達成した。④テキストの6刊本を収集し、各刊本の影響関係を調査し、最も後に出版されたものを底本に選定して、テキスト校訂をすることとした。6刊本とは、K.タルカヴァーギーシャ校訂版(1884-1901)、M.G.パークレー校訂版(1931)、N.K.R.タターチャールヤ校訂版(1972)、P.K.セン校訂版(1979)、K.N.チャッテルジ校訂版(1981)、A.K.サードゥカン校訂版(2013)である。⑤註釈書については9本を入手し、その中で最も古いもの(ラーマバドラ[1570年頃]作『定動詞語尾論註』(Akhyata-vada-vyakhya)と伝統の中で最も信頼度が高いもの(マトゥラーナータ[1650年頃]作『定動詞語尾論解明』(Akhyata-vada-rahasya)とを利用することとした。⑥テキストの構造を分析して、全体を11部分に分割した。⑦テキストの題名として『定動詞語尾論』(Akhyata-vada)と『定動詞語尾表示機能論』(Akhyata-sakti-vada)との2つがあるが、どのような事情でこの2つが存在するかについての考察も行った。本研究者の仮説は、ラグナータの『定動詞語尾論』はガンゲーシャの「定動詞語尾章」のサンスクリット名と同じなので、混乱を避けるためにラグナータの作品名には「sakti」を挿入したというものである。以上の成果が発表論文に示される。

(2) 新N学派では言語認識は存在範疇と深く関わる。言語認識は、範疇の最終要素にたどり着くまで分析が進められる。言語認識の発生を説明可能にするために、古ニヤヤでは認められていなかった範疇が、ラグナータ作『パダールタ・タットヴァ・ニルーパーナ』(範疇真理述解)の中で承認されるという事態が起こった。例えば新たな範疇として原因性(karanata)が加えられた。日常の言語によるコミュニケーションを正統な認識手段として承認し、言語認識の発生過程を範疇論に基礎付けるというニヤヤ学派の立場が明確に見て取れる。この成果が学会発表と発表論文である。

(3) 『定動詞語尾論』の11部分の内、最初の4部分について、「研究成果(1)」で言及した刊本と2つの註釈書とを用いて、テキストを校訂し、英語訳・解説をした。テキストの内容を理解するために必要となる諸概念の分析も行った。4部分とは、「1. 古ニヤヤ学

の説」「2. 新ニヤヤ学の一般説」「3. ミーマーンサー学の反論」「4. ミーマーンサー学の反論への古ニヤヤ学と新ニヤヤ学との反論」である。英語訳・解説を進める中で、新N学派の体系を確立したガンゲーシャの説でさえ「古ニヤヤ学説」として言及されることが判明した。

これら4部分から次のことが明らかとなった。定動詞語尾の意味に関して、ガンゲーシャは、能動態語尾が努力(yatna、決意: krti)を意味し、受動態語尾が対象性(karmatva)を意味すると主張したのと異なって、ラグナータは、能動態語尾でも受動態語尾でも努力を意味することとした。このラグナータ説はミーマーンサー学派のクマーリラの説に近い。

綱要書『ニヤヤ・シッダーンタ・ムクターヴァリー』では、定動詞語尾の意味として努力のみが言及されており、ガンゲーシャ説とラグナータ説の共通部分(つまり11世紀のウダヤナの説)を取り上げたという印象を与える。ただし、言語認識の構造を分析する箇所では、本研究で扱えなかったテキスト部分に現れるラグナータ説が言及される。

本研究者のこれまでの言語理論に関する研究では、定動詞語尾(akhyata)、努力(yatna)、動詞語根(dhatu)、表示機能(vrtti)、言語認識(sabda-bodha)、意味(artha)の分析を研究成果として簡潔に記述してきたが、本研究では規定者(prakara)の記述を追加した。これらの成果をまとめたものが、学会発表と発表論文である。

(4) 「研究方法(2)」で述べた動詞語根の意味に関する主張を、ラグナータとガンゲーシャについて比較するために、ガンゲーシャの「動詞語根章」を英語訳し解説し分析し、両者の主張の違いを明確にした。すなわち、ガンゲーシャは「結果を生み出す運動」(phalananukula-vyapara)あるいは「運動」(karman, vyapara)としたのに対し、ラグナータは前者のみとした。綱要書『ニヤヤ・シッダーンタ・ムクターヴァリー』では動詞語根の意味については議論がないが、『マニカナ』ではある。しかし、2人の説の内のいずれに言及しているかは確定し難かった。

英語訳と解説は、イタリアの学術誌に投稿し校了したが、出版は残念ながら最終年度内に間に合わなかった。分析部分は、発表論文として公表された。

(5) ラグナータの独立作品『否定辞論』と内容が酷似した、作者と著作年代不明の『否定辞論頌』(Nan-vada-karika)の写本が、2005年にインド・オリッサ州で博物館に所蔵されていたことが判明し、インド人研究者とこれを研究し、成果を2013年に刊行した。ここでは「前者から後者が作られた可能性を否定できない」という主張をしたが、本研究では、両作品の先後関係を再考し、一歩踏み込んで

「前者から後者が作られた可能性が高い」と結論づけた。さらに、『否定辞論』にはマテイヤルによる英語訳が存在するが和訳が未だないので、和訳を作成した。この和訳の重要性は次の点にある。難解な文献を日本語で近づけるようにしたということのみならず、新N学派の術語は英語訳よりも和訳が未だ確立されていない場合が多く、『否定辞論』の和訳は、言語理論に関する諸術語の和訳を提案するという役割を果たす。

これらの成果を収めた論攷は、最終年度内に校了したものの、刊行が間に合わなかった。ラグナータの『否定辞論』と著者不明の『否定辞論頌』との比較研究は本研究に直接関わるものではないが、新N学派におけるラグナータの影響力が大きかったことを再確認させることとなった。

(6) 上述の(1)から(5)の成果をまとめると以下ようになる。ラグナータ作『定動詞語尾論』の校訂テキストと英語訳・解説とを、全体11部分の内4部分に限られるが終え、定動詞語尾と動詞語根の意味に関して、ガンゲーシャに比べてラグナータは独自性を出そうとしていると結論づけられる。しかしながら綱要書を見る限りでは、必ずしも伝統説として一方が承認されていたわけではない。

(7) 発表論文は、国際的な評価が定着した学術誌に掲載され、研究成果の国際発信という目的は達成できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

WADA Toshihiro, Gangesa on the Meaning of Verbal Roots (*dhatu*), *Journal of UA Foundation for Indological Studies*, 査読有, Vol. 2: Karl H. Potter Festschrift, 2016, pp. 35-50.

WADA Toshihiro, The 'Discourse on Verbal Suffixes' (*Akhyata-vada*) of Raghunatha Siromani (2), *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa*, 査読有, Vol. 33, 2016, pp. 47-72.

和田壽弘、新ニヤーヤ学派ラグナータの存在範疇としての因果関係について 生成力 (*sakti*) と原因性 (*karanata*) 東海仏教、査読有、61 輯、2016、pp. 246-262.

WADA Toshihiro, The 'Discourse on Verbal Suffixes' (*Akhyata-vada*) of Raghunatha Siromani (1), *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa*, 査読有, Vol. 32, 2015, pp. 35-45.

〔学会発表〕(計 2件)

和田壽弘、インド新論理学における動詞語根の意味とその研究意義、東海印度学仏教学会第 62 回学術大会、査読有、2016.7.9、愛知学院大学。

和田壽弘、インド哲学における実在論的範疇論の変遷 新ニヤーヤ学派における因果関係の確立のために要請される範疇、東海印度学仏教学会第 10 回春季学術大会、査読有、2015.5.9、名古屋大学。

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 壽弘 (WADA, Toshihiro)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00201260

(2) 研究分担者
なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者
なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者
なし ()